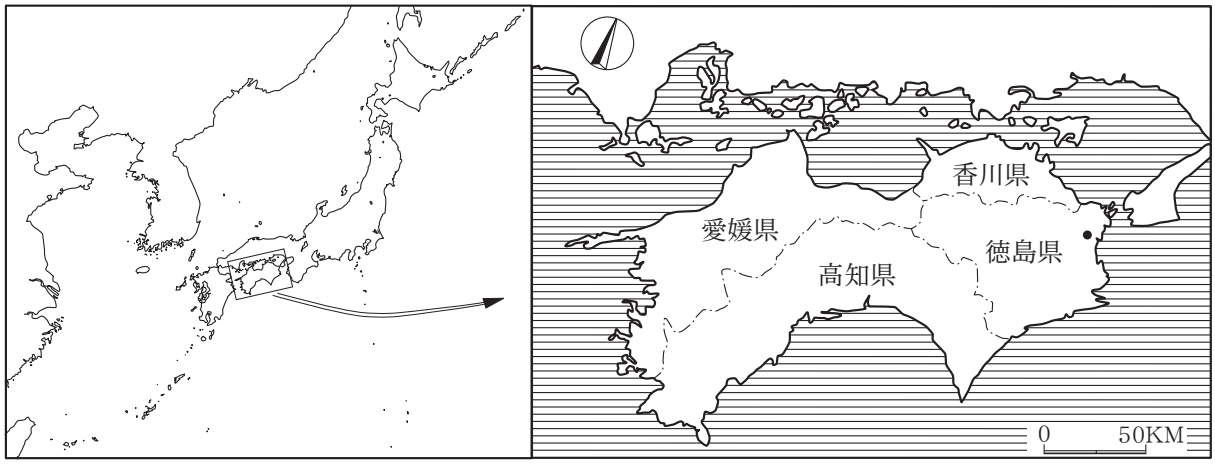
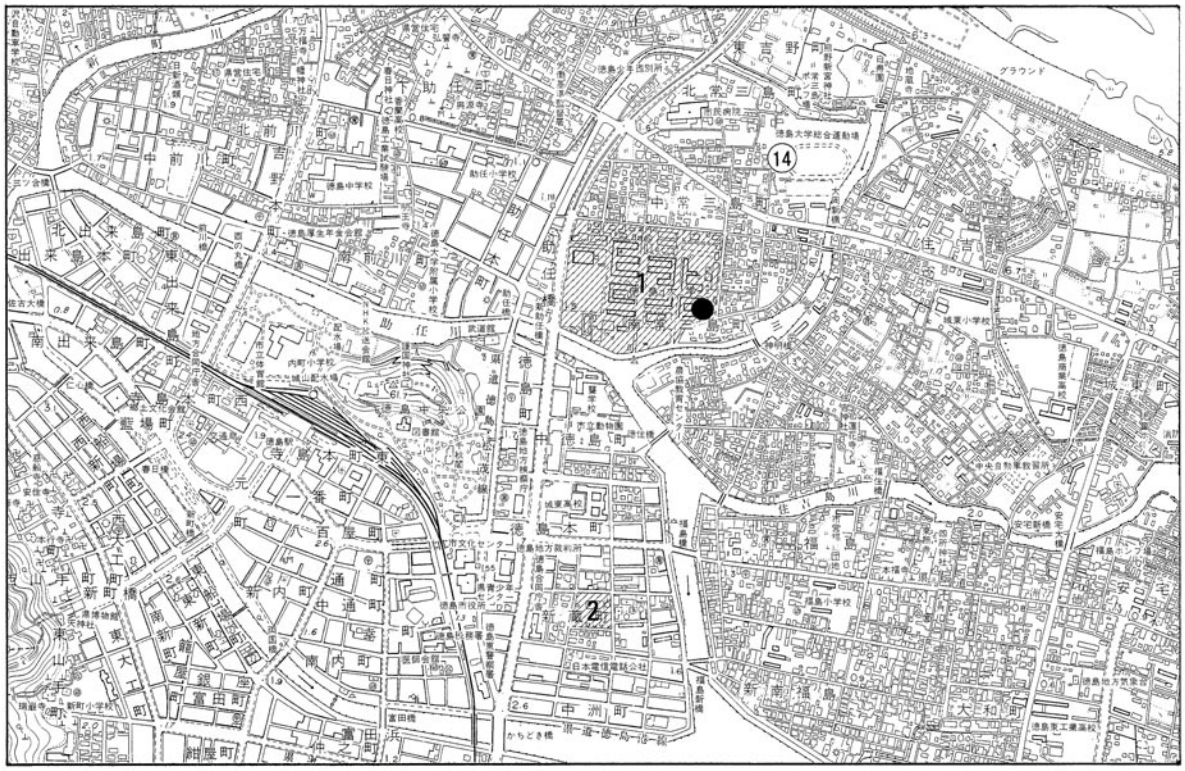
第１章　は　じ　め　に

第１節　調査に至る経緯と調査体制

徳島大学常三島キャンパスは、徳島市南常三島町１丁目・２丁目に所在する。江戸時代からこの一帯は“常三島”と呼ばれ、現在も北常三島町・中常三島町・南常三島町という町名としてその名称が残っている。この地域の遺跡を常三島遺跡（第１・２図、図版第１）と総称しているが、これは「埋蔵文化財包蔵地としての徳島城下町跡」の一部をなすものである。 埋蔵文化財調査室は、調査室が設置された



第１図　常三島遺跡位置図　●が常三島遺跡



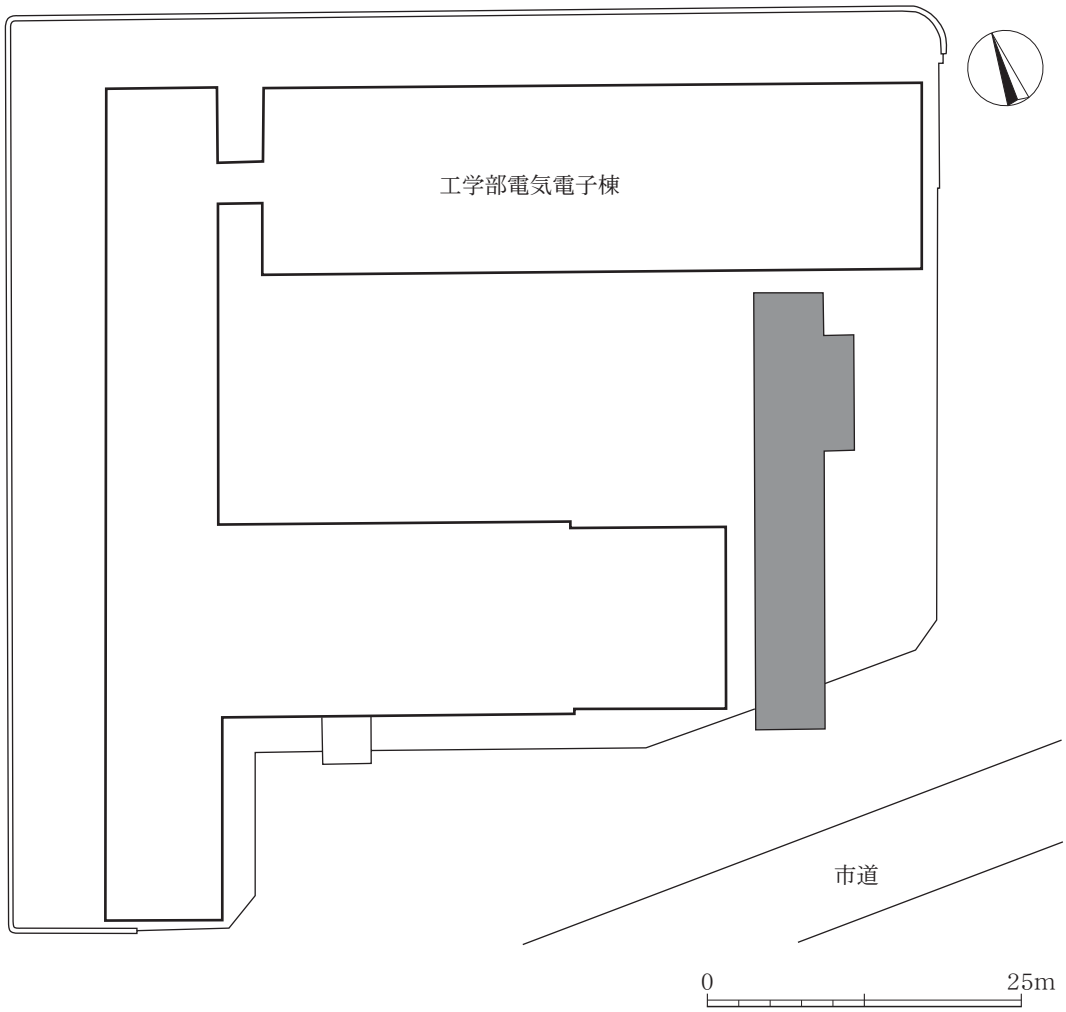
第２図　調査地位置図（縮尺：１／20,000）
1. 常三島遺跡（常三島キャンパス）　2. 新蔵遺跡（大学事務局）　⑭は第14次調査地点　●は電気電子棟地点

1992年より、主に工学部で行われる工事に先立って、常三島遺跡の埋蔵文化財発掘調査を継続して行ってきた。それらの調査成果から、本遺跡では江戸時代の様々な遺構が極めて良好に残っていることを確認してきたところである。

2002（平成14）年、徳島大学工学部電気系実験研究棟（電気電子棟）の改修工事を行うことが決定され、その改修工事に伴って南棟建物の一部増築、および南棟と北棟とを結ぶ渡り廊下の新設が計画された。今回のこの工事も、増築部と渡り廊下部分は掘削深度が深く、当該地の江戸時代の遺構が破壊されることが確実であったため、埋蔵文化財発掘調査を実施する必要性が出てきた（第３図）。

埋蔵文化財調査室では、この「徳島大学工学部実験研究棟改修その他工事」に伴う埋蔵文化財発掘調査を、以下の調査体制でもって、2002年５月20日より８月５日まで実施した。以下の肩書き等は、発掘調査当時のものである。

調査主体　　徳島大学施設委員会
　　委員長　齋藤史郎　徳島大学学長
　　徳島大学埋蔵文化財調査室
　　室長　　定森秀夫　総合科学部助教授



第３図　発掘調査区位置図（縮尺：１／600）　黒塗りつぶし部が発掘調査予定区画

調査員　　定森秀夫（現場主任）
　　中村　豊　大学開放実践センター助手
調査補助員　堺　圭子・井本尚子・安山かおり　施設部技術補佐員

なお、最終的な発掘調査面積は253㎡であった。

徳島大学構内の常三島遺跡に対する発掘調査は、1992年から始まり、2003年までの12年間で計17次にわたる。調査期間の長短はあるものの、１年に最低1.4回の発掘調査を行っていたことになる（第１表、第４図）。

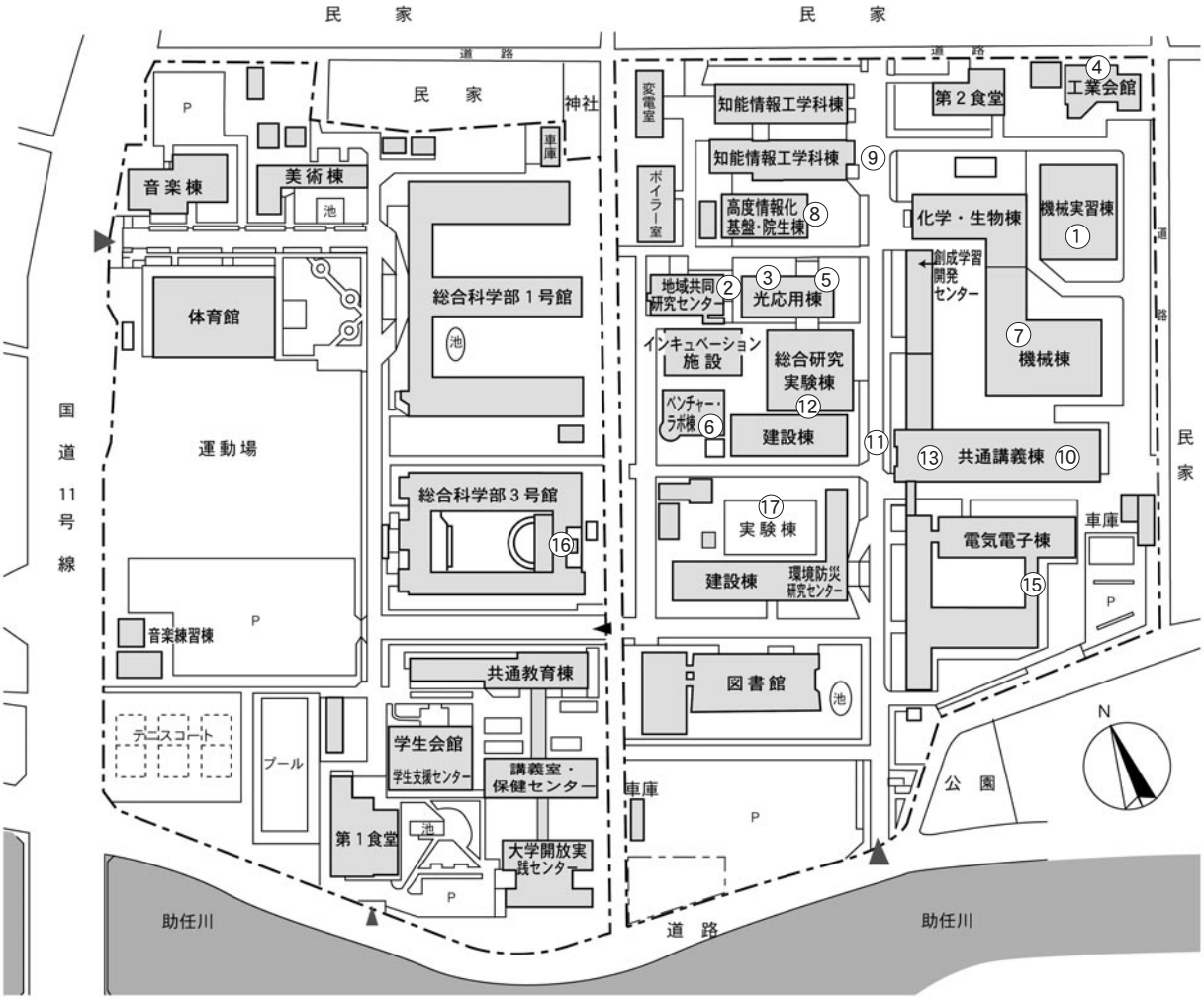
そのうち、第４次調査は工学部の工業会館地点の調査であるが、調査主体は徳島市教育委員会であった。この調査に関しては、すでに1997年に調査概報が刊行されている（第３節の参考文献参照）。

いっぽう、徳島大学埋蔵文化財調査室が主体となった調査は16次に上るが、諸般の事情により発掘調査報告書を刊行できない状況が続いていた。したがって、正式な常三島遺跡発掘調査報告書としては、本書が初めてとなる。

本来であれば、第１次調査から順次発掘調査報告書を刊行していくべきところであるが、2002年４月

第１表　常三島遺跡（徳島大学構内）発掘調査一覧表

調査名	調査実施年（年度）	調査地点	調査面積（㎡）	調査期間	調査主体	担当者（○は現場主任）
第１次調査	1992年（平成４年度）	工学部実習棟試掘	160	9月10日～9月20日（11日間）	徳島大学	東　潮 ○北條芳隆
第２次調査	1993年（平成５年度）	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日（１ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○北條芳隆
第３次調査	1995年（平成７年度）	光応用工学科	783	8月22日～3月25日（７ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第４次調査	1995年（平成７年度）	工業会館	400	12月1日～1月31日（２ヶ月）	徳島市教委	勝浦康守
第５次調査	1996年（平成７年度）	光応用工学科－追加	165	4月17日～5月30日（１ヶ月半）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第６次調査	1996年（平成７年度）	サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日～8月10日（２ヶ月）	徳島大学	東　潮 ○橋本達也
第７次調査	1997年（平成８年度）	機械工学科	1,800	7月24日～11月8日（３ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村　豊
第８次調査	1997年（平成９年度）	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日（２ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆
第９次調査	1998年（平成９年度）	共同溝	178	7月22日～9月4日（１ヶ月半）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第10次調査	1999年（平成10年度）	共通講義棟Ⅰ	900	5月10日～6月7日（１ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第11次調査	1999年（平成10年度）	共同溝Ⅱ－４	200	6月28日～8月11日（１ヶ月半）	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也
		共同溝Ⅱ－１ 共同溝Ⅱ－２	171 300	7月15日～5月26日（10ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年（平成11年度）	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日（４ヶ月）	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年（平成12年度）	総合教育研究棟（共通講義棟Ⅱ期）	1,110.6	3月15日～6月8日（３ヶ月）	徳島大学	北條芳隆 ○中村　豊
第14次調査	2002年（平成13年度）	総合グランド管理舎器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日（２週間）	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年（平成14年度）	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日（２ヶ月半）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊
第16次調査	2002年（平成14年度）	総合科学部３号館	532	7月29日～10月31日（３ヶ月）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊
第17次調査	2003年（平成15年度）	工学部建設（総合研究）棟	381	4月28日～7月17日（２ヶ月半）	徳島大学	○定森秀夫 中村　豊



第４図　常三島遺跡発掘調査地点図　囲み数字は第１表の次数に一致（第14次調査地点の位置は第２図の⑭）

より調査室長が北條芳隆から定森秀夫にかわったこともあり、定森が赴任後初めて調査を行った2002年度の工学部電気電子棟地点調査の発掘調査報告書から刊行していくことにした。

今後、常三島遺跡の発掘調査報告書を順次刊行していく予定であるが、膨大な数量の遺物がほとんど未整理の状態にあり、整理作業に相当の期間を要するものと思われる。そのため、正式報告書を刊行する前にも、常三島遺跡に関する重要な情報などは、埋蔵文化財調査室のホームページや刊行物、学内外の刊行物で積極的に公開していくつもりである。また、報告書刊行の遅延を理由に資料の活用に制限を加えるものではないので、報告書未刊のものでも、いつでも必要であれば利用してもらえるような状況にしておく予定である。

第２節　調査方法と調査経過

これまでの常三島遺跡における測量基準点は、第３次調査の際、工学部総合研究実験棟の東側の道路上に任意に設置した基準点であった。そして、第11次調査の時点でその基準点が壊されることになり、より北側に位置する工学部知能情報工学科棟の東側道路にその基準点を３点移設した。工学部総合研究実験棟東側の測量基準点に依拠した調査は、第３次調査・第５～７次調査・第11～13次調査である。

第14次調査以前のそれ以外の調査に関しては、周辺の建物や地形を図面に入れることで将来の復元を可能にする方法をとっている。

第15次調査から第17次調査までは、上述の測量基準点に依拠して、グリッドを設定し、遺物の取り上げや実測などを行っている。しかし、この基準点は、あくまでも任意点であり、汎用性に欠けるため、第16次調査の総合科学部３号館地点調査時に、世界測地系に基づく国土座標をその任意の点に与える作業を行った。したがって、工学部電気電子棟地点発掘調査に関しても国土座標への変換が可能となった。上述した任意の測量基準点に依拠した調査に関しても国土座標への変換が可能である。

徳島大学構内の常三島遺跡発掘調査に関しては、上述した測量基準点に依拠して、構内全体に５ｍグリッドのメッシュを設定している。南北方向は、基準点を基点に南へ向かってＡＢＣの順でＺに至ったらまたＡから始めるという方式で、基準点ラインより北側もその順に従っている。東西方向は、基準点を基点に東に向かって１、２、３の順にして20までを数え、また１から始める方式で、基準点より西側もその順に従っている。グリッドは、北西隅の杭を基準とし、その杭の東南側の５×５ｍの区画として設定している（第８図左）。このグリッドは、基本的に常三島キャンパスの建物と平行するように設定されている。

工学部電気電子棟地点のＢ15・Ｂ17の世界測地系に基づく国土座標は、以下の通りである。

	Ｘ座標	Ｙ座標
Ｂ15	119968.201ｍ	98099.568ｍ
Ｂ17	119967.291ｍ	98109.526ｍ

なお、常三島遺跡の全体のグリッド配置図に関しては、次に刊行する常三島遺跡発掘調査報告書で詳しく説明することにし、本書では略述するにとどめた。

次に調査の経過に関して、以下に簡述する。

人力掘削の発掘調査に入る前に、アスファルト撤去と重機掘削の立会いを４月30日から開始した。しかし、地下埋設物が多かったことや雨が多かったため、重機掘削が終了したのは５月14日で、以上の作業で約２週間を費やしてしまった。５月20日から作業員を投入したが、壁面崩壊を防ぐための土留め作業と撹乱掘削にさらに時間がかかり、実際に発掘調査に着手し始めたのは５月27日からであった。

明治時代の水田Ｓ01を検出した後、５月30日に水田Ｓ01の全景写真撮影を行い、６月３日から第１遺構面までの掘り下げを開始した。遺構の密度は調査区北半で濃密であり、調査区南半では遺構をほとんど検出することができなかった。６月19日には、調査区南半の第１遺構面完掘状況写真撮影を行った。その後も調査区南半は遺構がほとんどなかったので、一気に第３遺構面である砂上面まで掘り下げて、６月21日に第３遺構面完掘状況写真撮影を行った。調査区北半は遺構が多く、切り合い関係が複雑であったため、第１遺構面全体写真撮影は調査区南半より遅れて６月24日に行った。

調査区北半では、第１遺構面の廃棄土坑である土坑Ｓ16から陶磁器・土器・瓦などが多数出土し、その処理に時間がかかってしまった。土坑Ｓ16の下に存在していた第２遺構面の石組み船入状遺構Ｓ36の調査は７月５日から開始した。その後、調査区西壁沿いに断ち割りを入れたところ、石組み船入状遺構Ｓ36よりやや西側に位置し、層位的にそれより下になる素掘り船入状遺構Ｓ41があることが判明した。この素掘り船入状遺構Ｓ41の平面的な調査は７月24日から開始した。７月26日午前に、石組み船入状遺構Ｓ36と素掘り船入状遺構Ｓ41の写真撮影を行い、午後にそれら船入状遺構に関する記者

発表を行った。その後、若干掘り残した部分の調査や実測図作成などを行い、８月５日に発掘調査作業のすべてを終了した。

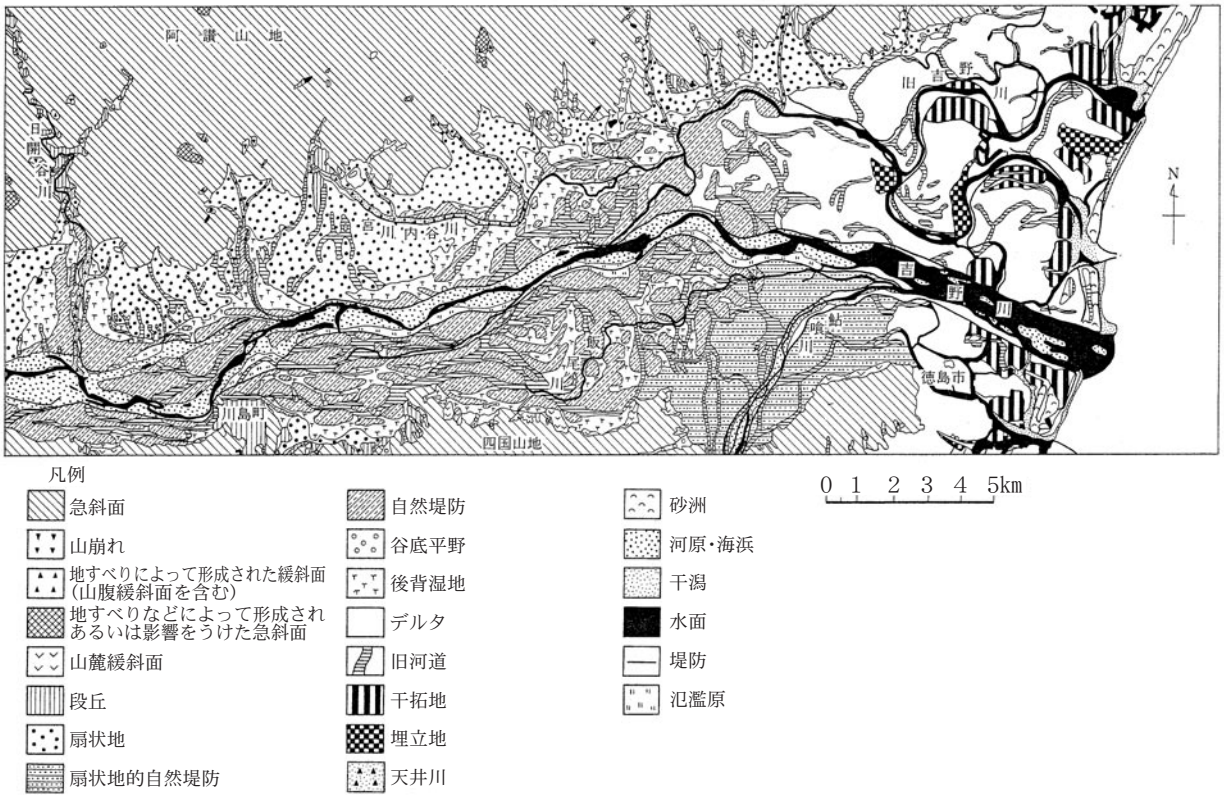
第３節　遺跡の地理的・歴史的環境

常三島遺跡が立地する吉野川河口域は、総延長194ｋｍの四国第一の川、吉野川によって造られた沖積平野をなす。吉野川は、「坂東太郎」の異称を持つ利根川、「筑紫次郎」の異称を持つ筑後川とともに、「四国三郎」の異称を持つ大河である。

吉野川は中央構造線に沿って流れ、その北岸には阿讃山地、南岸には四国山地が連なる。阿讃山地は主に和泉砂岩によって構成されているため、北岸では扇状地が形成され、いっぽう四国山地は結晶片岩によって構成されているため、南岸では侵蝕が少なく山塊が吉野川に迫るという、北岸と南岸とで地形的な特徴が異なる様相を見せる。

約6000年前の縄文海進では、現在の標高５ｍまでは海であったとされていて、その後の寒冷化で海水面が低下するとともに、吉野川が運ぶ土砂の堆積で徐々に三角州が形成され、陸地化していったものと考えられている（第５図）。

常三島遺跡周辺では、縄文時代の遺跡として、徳島城が築かれた城山（渭山）山麓に後期からの城山貝塚が存在する。弥生時代には眉山山麓に遺跡が形成されるが、主に眉山山麓でも西側であり、三谷遺跡・庄遺跡・名東遺跡などが知られ、発掘調査も進んでいる。しかし、常三島遺跡周辺に関しては弥生時代・古墳時代の遺跡は今のところ知られていない。



第５図　吉野川下流域地形図　大矢雅彦『河川地理学』（古今書院、1993年）、89頁の図7.6より

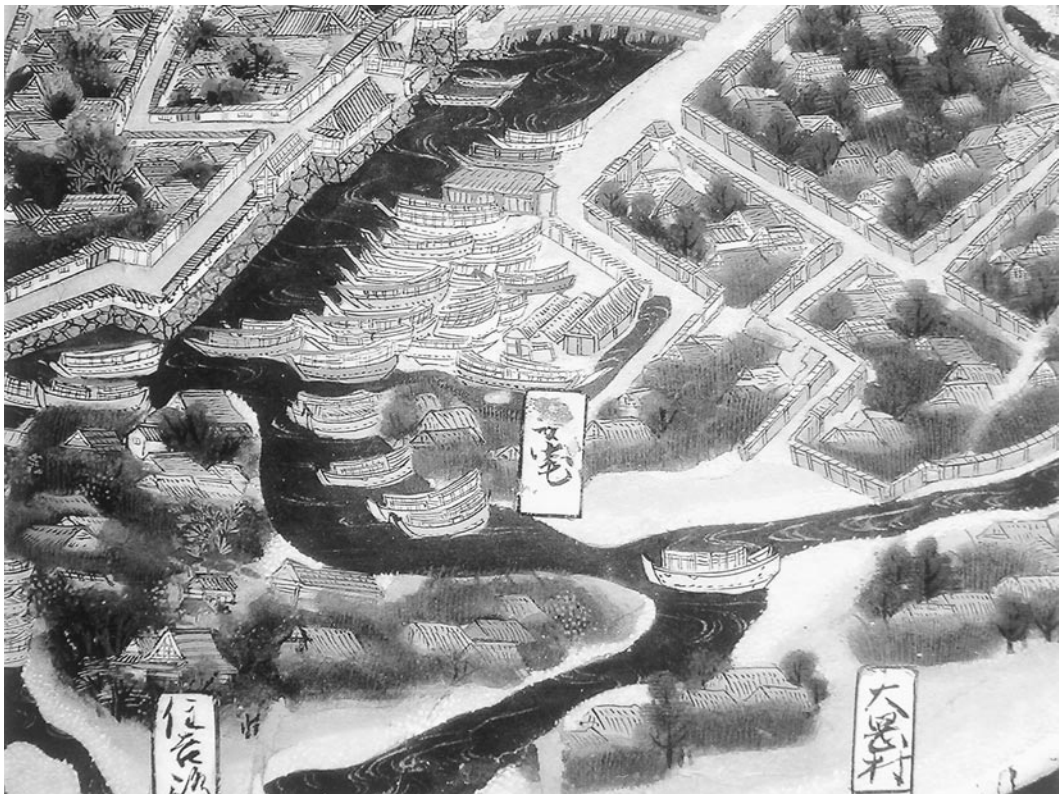
吉野川河口付近には阿波国の条里があり、奈良時代の８世紀中頃には東大寺領阿波国新島荘が置かれていた。この新島荘には３地区があり、そのうちの枚方地区が現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、10世紀頃まで新島荘が確実に存続していたことが文献記録に残されている。常三島一帯は、復元比定された地域より南東側にかなり離れているが、新島荘の枚方地区に含まれていた可能性もないではない。しかし、これまでの発掘調査による考古学的な状況証拠としては、その存在を示すものはいまのところ皆無である。

鎌倉時代に入ると、1203（建仁３）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立した記録が残されている。したがって、その頃には常三島一帯はさらに陸地化ないしは開拓が進められていたと推測されるが、新島荘の存在と同様に考古学的には実証されていない。

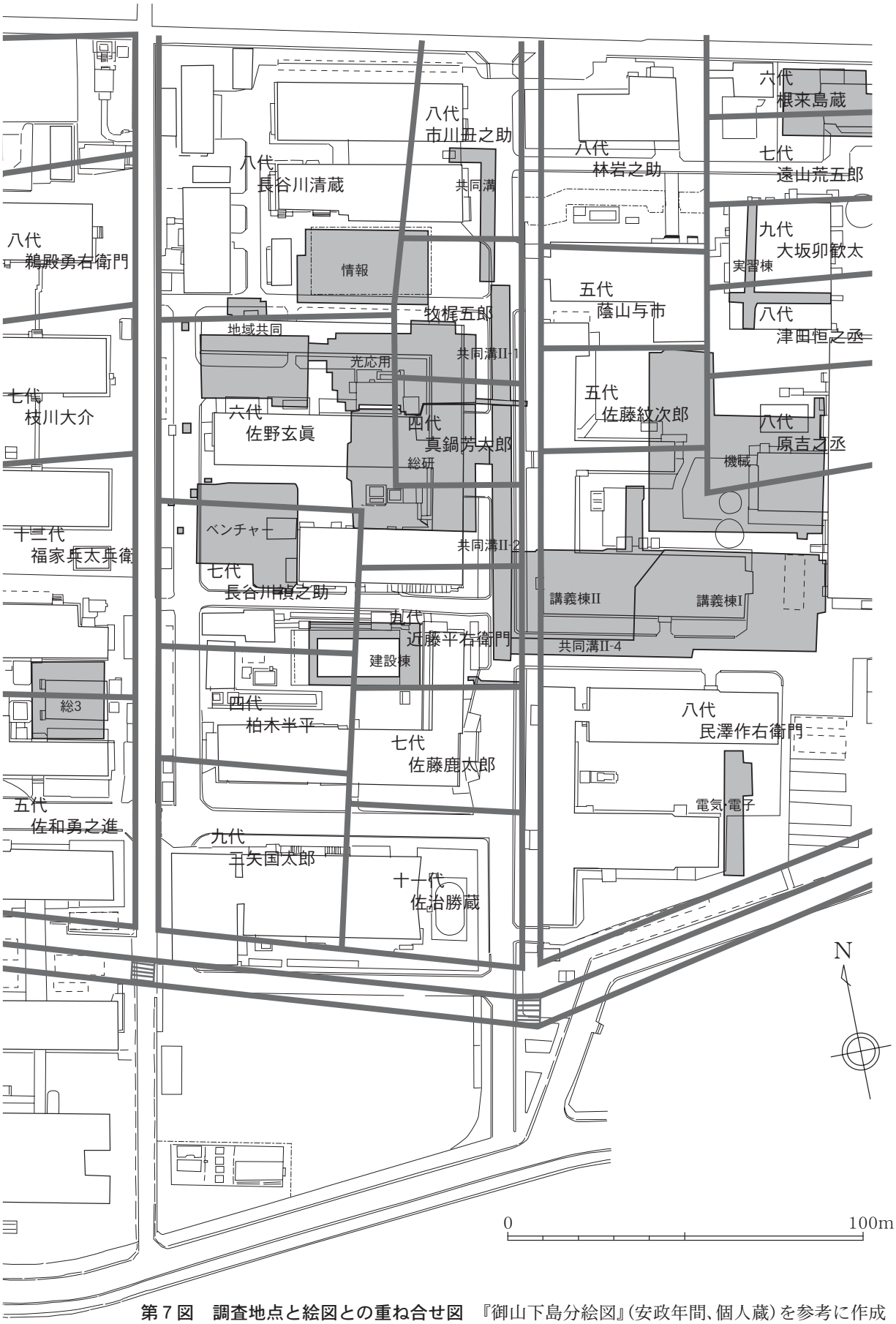
豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家正が阿波国に入部し、現在の徳島城を中心として城下町建設にとりかかることになる。

今回の発掘調査地点は、『徳島藩領国図屏風』（巻頭図版第１）や『忠英様御代御山下画図』（推定寛永年間、国文学研究資料館史料館蔵、第52図）などに描かれている徳島藩の初期船置所がおかれていた安宅島に該当する（第６図）。この初期船置所は、助任川の堆積が厚くなり、船の航行に支障が出始めたため、現在の安宅の地へ移設されることになる。

そして、初期船置所が現在の安宅に移されて以後、おそらく埋立てなどの土木工事を行って、武家屋敷地として整備された。家老や上級武士は徳島城近くの新蔵などに屋敷地をもち、常三島は中下級武士の屋敷地であった。発掘調査地点は、民澤家の屋敷地としてそれ以後継続されていく。この民澤家の宅地は、常三島では最も大きな宅地であった（第７図）。



第６図　『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大



第７図　調査地点と絵図との重ね合せ図　『御山下島分絵図』（安政年間、個人蔵）を参考に作成

なお、これまでに公刊された徳島城下町遺跡の調査報告書・概報を以下に挙げておきたい。本書は、それらの報告書を参考にしている。

勝浦康守「徳島城跡（確認調査）」（『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要６』所収、徳島市教育委員会、1996 年）。

勝浦康守「常三島遺跡（徳島大学工業会館建設工事）」（『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要７』所収、徳島市教育委員会、1997 年）。

松永佳美『城ノ内遺跡徳島城跡お花畠地点発掘調査報告書（県武道館･弓道場に伴う発掘調査報告書）』（徳島県教育委員会、1988 年）。

日下正剛・植地岳彦『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理センター（旧副知事公舎）地点―総合管理センター（仮称）建設に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 20 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、1998 年）。

日下正剛・植地岳彦・北野信彦『新蔵町１丁目遺跡　企業局総合管理事務所地点Ⅱ―徳島県企業局総合管理事務所駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 30 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、2000 年）。

日下正剛・植地岳彦・北野信彦ほか『南前川町１丁目遺跡―鳴門教育大学（附小）校舎新営埋蔵文化財発掘調査報告書―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 36 集、徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター、2002 年）。

斎藤剛『徳島城下町遺跡出来島本町１丁目地点―徳島公共職業安定所及び徳島障害者職業センター庁舎新営地における埋蔵文化財発掘調査報告―』（『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書』第 47 集、徳島県教育委員会･財団法人徳島県埋蔵文化財センター･徳島労働局･日本障害者雇用促進協会、2003 年）。

勝浦康守『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』13（徳島市教育委員会、2003 年）。